

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Oral survey of second-grade elementary school students in Hokkaido, Japan: Adjunct study in Sapporo Study Area of the Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル:

北海道における小学2年生の口腔内調査:エコチル調査の札幌地区での検討

ユニットセンター(UC)等名:北海道ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名:北海道矯正歯科学会雑誌

年: 2024 DOI:

筆頭著者名:菊池 媛美

所属 UC 名:北海道ユニットセンター

目的:

近年の国内では小児のう蝕罹患率が低下し、不正咬合を主訴として歯科医院を受診する患児の割合が増加している。これは歯冠幅径の増大傾向など児童を取り巻く環境変化に伴う口腔内の状況の変化による影響が考えられる。過去に不正咬合に関する実態調査が行われているが、近年同様の調査は実施されていない。そこで、現代の児童の不正咬合および永久歯の萌出状況を把握することを目的として実態調査を行った。

方法:

研究対象は、エコチル調査の北海道札幌地区において2021年7月から2022年3月までに歯科追加調査に同意した小学校2年生の児童82名(男児46名、女児36名)であった。対象者には永久歯の総萌出本数、第一大臼歯萌出本数、永久前歯萌出本数、不正咬合の発現率と分類、矯正治療経験の有無について調査を行った。

結果:

全調査対象(8.1±0.23歳)において少なくとも1本以上の第一大臼歯が萌出しており、永久前歯は上下中切歯及び下顎側切歯については萌出が完了し、上顎側切歯は半数以上が未萌出であった。また、対象児童の半数以上が何らかの不正咬合を有し、その種類別発現頻度は叢生25名(59.5%)、反対咬合8名(19.0%)、上顎前突7名(16.7%)、偏位5名(11.9%)、過蓋咬合5名(11.9%)、開咬2名(4.7%)であり、叢生が最多であった。

考察(研究の限界を含める):

永久歯の萌出率について、先行研究と比べ、本研究の結果では同様の傾向が認められた。平成28年度の歯科疾患実態調査の対象者と年齢や歯の萌出状態が異なること、診断基準の違いが実態調査と本研究の結果との間に不正咬合の発現率の差の原因であることが示唆された。また、叢生が最多であった要因として歯冠幅径と上下顎骨の大きさといった人類学的要因が関与している可能性が考えられる。矯正歯科治療の早期開始は一定の効果をもたらす可能性が考えられるが、第I期治療の開始時期についての見解は様々であり、現段階で矯正歯科治療介入時期について評価することは困難であるため、定期的に観察していくことは重要である。

結論:

今回、北海道札幌地区の小学2年生の児童における永久歯の萌出と不正咬合の実態を明らかにすることができた。